

早稲田大学 グローバルCOE 「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」
調査研究支援スキーム 成果報告

所属 アジア太平洋研究科博士後期課程 学年 1年 氏名 内海 悠二

日程 2007年11月 22日 ~2007年 11月 26日
渡航地（国・都市名）

カンボジア・プノンペン

リサーチ目的

カンボジアは70年代より内戦が20年に亘って続いたため、未だ土地登記制度や法制度も確定しておらず、紛争が市民社会に深く影響している状態にある。当該国家のこのような状況を考慮し、本調査研究活動は下記の研究テーマの①である「学校要素及び学校外要素が異なる紛争経験をした地域間ではどのように変化するのか」という課題に焦点を絞り、その中でも初期段階のパイロット調査としてカンボジアでの紛争経験の地域的差異を把握することを目指す。具体的には、UNESCOプノンペン事務所を訪れ、紛争がカンボジア社会及び経済活動等に与えている影響、及び地域的な教育事情の差異を現地職員からの聞き取り調査を中心として把握する。また、時間が許すかぎり、UNESCOが活動しているサイトをいくつか訪れ、現地社会の差異と紛争の影響の差異を実際に把握したいと考えている。

研究課題

申請者の研究テーマは、「紛争」という新しい観点から考える「学校効果研究」であり、「学校効果」に対する「紛争」の影響力を模索することである。
これまで、当該分野の基本的傾向の把握を一義的な目的として、「学校要素と学校外要素のどちらの方が初等中等段階における生徒の学業成績に大きな影響を及ぼしているのか」という学校効果研究の古典的課題を設定し、紛争の有無を考慮した量的比較分析を行ってきた。

博士課程においては、これまでの研究に引き続き、現象把握のための研究を基礎に再度精密な比較分析を行い、更に紛争の有無によって「なぜその差異が生じるのか」という原因把握までを射程に入れた研究を行う。そのために本研究は、まず分析対象国家を2~3ヶ国に特定して政治文化等の他の要因を出来る限り排除する。その上で、「紛争」の学校要素と学校外要素に対する影響が、①「異なる紛争経験をした地域間ではどのように変化するのか」、そして②「紛争経験の差異によってなぜ影響の相違が生まれるのか」という具体的な課題を設定し、量的・質的双方からの分析によって当該原因を明らかにすることを目指す。そして、これらの研究を通して「紛争」と「紛争が学校効果に与える影響」とをつなぐ媒介要因を特定し、当該関係に対する理論的説明を構築することを最終的な目的とする。

成 果

担当者が訪れた11月23日～25日はカンボジアではちょうど水祭りの時期でもあり、全国から市民がプノンペンに集まっており大変な賑わいであった。街中を歩いているとこの場所で70年代にクメール・ルージュによって虐殺が行われ、10年前まで内戦が行われていたとは思えないほどの市民の活気を感じ取ることができた。しかし、プノンペンが首都であることを考えれば、その規模やインフラ、公共施設の完備はインドネシア等の他の東南アジア諸国と比べて格段に低く、経済発展に対する紛争の影響が残っているのではないかと思わせることも事実である。また、市民の中には紛争によって手足に障害を持っている者も多く、未だ紛争が市民社会に何らかの影響を及ぼしていることは容易に想像がついた。しかし、今回の調査では辺境地域での紛争の影響が更に深刻なものであることも分かった。

UNESCO プノンペン事務所では National Program Consultant の Dr. DY, Sam Sideht から UNESCO の紛争に関するプロジェクトの一つである Conflict Prevention through Education, Education for Peace and Development project の資料を提供してもらい、話を聞くことができた。当該プロジェクトはプノンペンから南西に100キロほどの場所に位置する Kampot 県 Koh Sla エリアにある2つのコミュニティーの計18村、15,000人の村民を対象として教育機会の拡充、職業訓練、村民の生活環境の改善、及び平和文化と生きることの価値についての支援を行っている。Koh Sla エリアは、クメール・ルージュが最後まで支配していた地域であり、その時代に行われた人権侵害行為により村民が精神的トラウマに苦しめられている等、今なお紛争の影響が深刻である。また、クメール・ルージュ時代は学問が禁止されていたために Koh Sla エリアの村民は1997年にカンボジア政府に引き渡されるまで十分な教育も受けていない。また、クメール・ルージュより解放された後も感染症や水道水の不足が日常化していたため、カンボジア政府でさえ当該エリアへの介入を嫌い、最近まで完全に孤立したエリアであった経緯もある。これらを勘案すると教育の普及は他地域と比べて相当に発展途上段階にあり、紛争による教育への現在の影響は最も大きいエリアであると言える。Koh Sla エリアを実際に訪れるることは出来なかったが、Dr. DY の話やUNESCOプロジェクトの写真を首都プノンペンと比較すれば、経済社会的状況の差は通常の辺境地域より更に大きく、また教育の普及状況の差は著しい。そして、このような状況の差異はクメール・ルージュ時代の人権侵害とその後の内戦の影響が強く反映した結果である可能性が非常に高いということが分かった。

また、今回の研究調査ではプノンペン在住の市民（25歳）に対してインタビューも行った。彼によれば、プノンペンでは大学院を卒業したとしても良職に就くことが困難であると共に農村部においては教育自体の重要性の認識が低く、カンボジア全体の教育の普及は大変遅れている。また、クメール・ルージュ時代については市民社会全体に根付いた暗い過去というイメージが未だに強くあまり話したがらなかつたが、その時代に学問発展が妨げられたことが現在に影響しているのではないかと示唆していたことが強く印象に残った。

事業推進担当者確認 (署名・押印)		
メイン	黒田 一雄	
サブ	勝間 靖	

* A4 2枚以内。各項目のスペースはご自由に変更下さい。